10月29日　創世記1章

説教題：「原初より響き渡る声」

今日の聖書個所は、私たちが持つこの聖書の最初の部分、創世記における天地創造の最初の瞬間の出来事であります。天地創造の最初と言われると、神様の「光あれ」という言葉によってすべての創造が始まったことが印象的な箇所です。光が生まれる前の世界は、当たり前ではありますが光がありませんので、世界は暗闇に覆われていたことになります。そこに神様の言葉が響き渡ります。「光あれ」と。そうして世界が生まれ始めるのです。今日の個所の続きでは、神様は次々に、その言葉によって世界を形作っていき、その言葉によって作られたすべてのものを「良い」と判断されました。

全ての創造は神様の言葉によって行われ、私たち人間には神様の「息」によって命が与えられました。神様は、私たちの肉体の創造ではなく、私たちの命の創造にその息を込めてくれたのです。神様によって込められたその息は「魂」という意味を持つ言葉でもありました。私たちは、神様によって込められた魂を、その心の中に宿しながら、この世界を生きているのです。その息は、時に言葉という形で、時に音楽という形で、この世界に現れることになります。この世界の初めから存在した言葉が、原初より響く神様の「良い」という言葉が、私たちのことを支える声となって響き続けているのです。

そしてこの世界にも、創造の初めから様々な「音」が存在しました。それは自然の音として、様々な動物の鳴き声や、草木のこすれる音、波の打ち寄せる音と共にこの世界は音を奏で続けてきました。いわば、自然の「音楽」をこの世界は奏で続けているのです。

今日、私たちは秋のチャペルコンサートをこの会堂で行います。3年間行うことができなかった音楽による交わりが、賛美と喜びの声と、素晴らしい調べがこの会堂を満たすことになります。この世界が生まれたときから、神様がその言葉を発した時から、この世界は様々な音で、音楽で満たされていました。

時に私たちは、音楽によって、歌を歌うことによって、神様を賛美してきました。「角笛を吹いて神を賛美せよ。琴と竪琴を奏でて神を賛美せよ。太鼓に合わせて踊りながら神を賛美せよ。弦をかき鳴らし笛を吹いて神を賛美せよ。」今日、私たちは礼拝の中で賛美を行いながら、またチャペルコンサートを通じて、そのすべての音楽をもって賛美を行うのです。原初から聞こえてくる、始まりのその時から聞こえてくる、神様の「良い」という声を受けて、私たちもまた「良い」ものを神様にお捧げするのです。神様に支えられて賛美を行い続ける、その喜びを胸に、今日一日の歩みを、これからの歩みを共に進めていきましょう。

今日の説教箇所：創世記１章

・１：初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。

ヨハネによる福音書１章1～4節

・1：初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。